

田與三衛門・長谷川内右衛門と申者存知居候。又越後芝田因幡、景勝へ逆心の時、會津より加勢参り候處、我等に申付られ、彼塚に待掛け、我等も首一つ捕りたり。直江に罷在候松田五左衛門・狛喜八郎と申者存知候。又武藏八王寺にて鎧を合せ、鎧にて首一つ捕りたり。此儀は舟喜治部左衛門存知居候。又庄内おうらの城に楯籠り、一揆に攻められ、大手にて鎧を合せ、一々所手負候。此儀は景勝内嶋津、いも川能存知候。とあり。右加藤木工左衛門が子孫は元本多家士に無之と云ふ。斷絶せしか、又は他家へ奉仕せしか、詳かならずとぞ。尙追考すべし。

○小出兵庫傳話

兵庫は、本多安房守政重の家士、家祿三百石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。小出兵庫、本國信濃也。信州小笠原殿、上杉景勝領麻積と云ふ所へ、天正十一年三月被働時、あづき坂と云ふ處にて武名の者を討取り首捕りたり。加藤木工左衛門存知候。又眞田安房守方に罷有る時分、御所様眞田居城上田へ御働被成、眞田源三持口の町脇にて鎧合有之、我等も鎧の内へ入りたり。様子は直江に有之

吉池權右衛門・吉池平右衛門と申者存知居候。又直江山城最上へ働の時、十月朔日の退口に、最上殿自分したはれ候處、山城四・五騎にてもり返し、其時眼前にて首一つ捕り、手をも負ひたり。内本左衛門存知候。と載せたり。右小出氏の子孫は絶えたりけん、今はなしといへり。

○村井次郎左衛門傳話

次郎左衛門は、本多安房守政重の家士にて、家祿三百石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。村井次郎左衛門、本國近江。初め明智日向守所に罷有、其時分片田知鷲与申者大將にて一揆共籠居たるを、信長公御攻めの時、首一つ捕る。大津に罷有る津田忠兵衛・片田に居候白石關右衛門と申す者存知居候。又丹波之高城を攻候時、首一つ捕りたり。長岡越中殿に罷有る北村兵助と申者存知候。とあり。此の子孫も絶えたるか、今はなしといへり。

○立川次左衛門傳話

次左衛門は、本多安房守政重の家士、家祿百石與へ、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。立川次左衛門本國美濃、始め不破彦三所に罷有、其時分關東松枝之城大納言

利家卿御攻被成時、二の丸・出丸に火を懸け、何茂押寄せける處、右出丸より鐵炮打懸候ゆゑ、竹束を付かね居たる處、我等一人上之段まで竹束を持上り候て、後惣人數竹束を附けたり。右之様子は波田三郎兵衛・橋半左衛門存知居候。又羽柴加賀守方に罷有候時、本吉にて使役仕り候時、首二つ捕りたり。彦三内瀬川茂左衛門存知候。又五月七日大坂櫻の馬場に於て、もぎ付の首一つ捕りたり。此儀淺野將監に斷り、首捨候。と載せたり。立川氏の子孫絶えたるか、今はなしといへり。

○藤田藤太夫傳話

藤太夫は、本多安房政重の家士、家祿貳百石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。藤田藤太夫、本國越前也。小牧陣の時、なしと申所へ中入仕ける時、走廻り首一つ捕りたり。山崎志摩手印呉れけり。佐久間河内被存知候。又伊豆山中之城被攻時、首一つ捕候。太閤様より金錢被下、蒔田權助存知候。又關、原御陣之時、伊勢津之城惣構を破り、二、丸取りける時、松浦安太夫と論じ、二、丸の櫓へ我等早く附候に付、安國寺持鎧くれ被申。瀧川豊前小島主膳存

知候。又大坂に於て、五月七日首一つ捕候。篠井雅樂助存知候。とあり。右藤太夫の子孫は藤田吉之助とて、世々本多氏に仕へたり。其の居宅は下本多町六番丁なりと云ふ。

○原采女傳話

采女は、本多安房守政重の家士、家祿百五拾石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。原采女本國信濃、初め上杉三郎殿に罷有。景勝と景虎との弓矢に成、五月十三日に罷出、景虎方の者岩戸と申古城に取籠候處、景勝働き落城の時首一つ捕りたり。景勝内大石次兵衛・松浦源左衛門存知居候。又景勝居城春日山へ働きける時、首一つ捕りたり。川地孫六・關屋七郎五郎と申者立合候て見申なり。又六月廿四日に景勝より景虎方へ働の時も、終日の懸合に走廻り、佐藤主膳と申者討捕りたり。唯今毛利殿に罷有る楯權右衛門・章間市兵衛と申者存知候。又七月廿八日中屋敷と申所にて合戦有之、首を捕り走廻るに付景虎より感狀賜り、于今所持仕候。又越中川田豊前所に罷有る時、佐々内藏助松倉へ働之時、城中に心替の者有之、案内仕町中迄押廻に付て、口々へ罷出、我等兄弟殿り仕、我等と鎧組候者を